
ハヤテのドラゴンボール

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのドラゴンボール

【Nコード】

N0720J

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

三千院家のお嬢様がサイヤ人にさらわれた。ハヤテたちは助け出すことができるのか？

第1話：ナギさらわれる

200X年XX月XX日XX時XX分、鳥取砂丘に丸い宇宙船が着陸した。その宇宙船の中から戦闘服を着た尻尾の生えた長髪の男が出て来た。

男の名はラティッツ。戦闘民族サイヤ人である。

ラティッツは左目に着けたスカウターで生命体を見つけると東の方へ飛んでいった。

練馬の一角に建つ皇居とも思えるお屋敷に天皇州　ハヤテは住んでいた。

ハヤテの日課は屋敷の主人である三千院　ナギを起こすことから始まる。

「お嬢様、起きて下さい。朝ですよ」

ハヤテはベッドの中で眠る金色長髪の少女を揺さぶるが起きる様子はない。

「お嬢様、起きないと大学に遅刻しますよ」

「後5分……」

仕方ない、そう思ったハヤテはキッチンへ行き、激辛ジュースを作って主人の寝室へ戻った。

「お嬢様、このジュースを飲んで目を覚まして下さい」

ナギは起き上がり、眠そうな顔で激辛ジュースを口にした。

「ん？　からっ！」

ナギは口から火を吹いた。

「おい、ハヤテ！　朝っぱらから何て物を飲ませるんだ！？」

「目が覚めましたか？」

「当然だ」

ナギはベッドから降りるとクローゼットの前まで行く。

「着替えるから出ている」

「了解しました」

ハヤテは部屋を出た。

（さて、朝ご飯の支度を）

ハヤテはキッチンへ向かった。そこでは妻のアテネが朝食の準備をしていた。

「アーたん、僕がやるよ」

「いいわよ、別に。ハヤテは休んでて」

「そう。じゃあお言葉に甘えて」

ハヤテは自室に向かう。その途中でホワイトタイガーのタマと出会^{くわ}した。

「うわ、危険動物」

「何だとてめえ？」

タマは立ち上がるとハヤテを壁に押し付けた。

「殺してやるうか、ああ？」

「僕が死んだらお嬢様やアーたんが悲しむからやめてくれないか」

「安心しな。お前が死んでも第二、第三のハヤテが執事を務める」

「僕は何人居るんですか!？」

その時、主人の寝室から悲鳴が聞こえた。

「退けタマ!」

ただごとではないと思ったハヤテはタマを突き飛ばしてナギの寝室へ向かった。

「お嬢様!」

ドアを開けて中に入るハヤテ。

割れた窓ガラスに脱ぎ捨てられたままの衣服。ナギの姿はない。

「アーたん!」

ハヤテはキッチンに駆け込んだ。

「どうしたの? そんなに慌てて」

「お嬢様が居なくなっただんだ」

「何ですって!?!」

アテネは料理を中断すると、ハヤテと共にナギの寝室へ行った。

（微かに何者かの気配が残ってるわ）

「ハヤテ、ナギは何者かに誘拐されたみたいよ」

「誘拐！？ いったい誰に？」

「分からない。とにかく追いましょう」

「追うってどうやって」

「ナギの気を辿るのよ。ハヤテ、あなたも執事ならそのくらい出来るでしょ？」

「出来ないよ」

「しょうがないわね」

アテネは目を瞑った。

（西に向かつてる！？ それももの凄いスピードだわ）

「ハヤテ、犯人は西に向かつてるわ。追いましょう」

ハヤテたちは屋敷を出ると西へ向かった。

空を西に向かつて猛スピードで飛行するラティッツ。そのラティツに頂^{うなじ}を掴まれているナギ。

「こら、放せ！」

「放したら落ちるぞ？」

「放すな！」

そんなやりとりをしていると鳥取砂丘の宇宙船の前に辿り着いた。

「暫くそこに居ろ」

ラティッツはナギを宇宙船に突っ込んで閉じ込めてしまった。

その頃、ハヤテたちは西に向かつて飛んでいた。

「アーたんがこんな力持ってたなんて吃驚だよ」

「こんなので驚いてもらっちゃ困るわ。私にはもっと不思議な能力があるんだから」

「じゃあ見せてよ」

「今度ね」

第2話：ナギ奪還（前書き）

ナギを助けるために西へ向かったハヤテたち。彼らはナギを救えるのか？

第2話：ナギ奪還

鳥取砂丘の宇宙船着地点にハヤテたちはやってきた。

「来たな」

と、ラティッツ。

「あなたですね、お嬢様をさらったのは」

「お嬢様というのは、あの中に閉じ込めてあるガキのことか？」

ラティッツが指差した宇宙船にはナギが閉じ込められていた。

「何かサイヤ人の宇宙船みたいですが、パクリでしょうか」

「ほう、よく俺がサイヤ人だと分かったな。褒めてやる」

「アーたん、この人ちよつと可笑しいよ？」

「そうですね。サイヤ人が実在するなんて」

「実在すんだよ！ お前だつてサイヤ人だろ、キヤルロット」

「キヤルロット？ 誰のことですか？」

「お前だよ水色頭！」

「ええ！？」

驚いてみるハヤテ。

「僕は綾崎 ハヤテです。そんな名前ではありません」

「お前は戦闘民族サイヤ人で名はキヤルロット。この地球^{ほし}の生物を皆殺しにするために送り込まれた俺の弟だ」

「何ですって！？」

「信じられないという顔だな。お前、尻尾はどうした？」

その問いにハヤテは幼い頃のことを思い出した。幼稚園に上がる前、ハヤテには尻尾が生えていた。しかし、みつともないという理由で親に切られたのである。

「そんなものとおくに無くなりましたよ。そんなことよりお嬢様を返していただけませんか？」

「いいだろう。但し、お前が地球人を皆殺しにしたらの話だ」

「そ……そんなこと出来ない！」

ハヤテは一瞬でラティッツの懐に入ると頭に回し蹴りを放った。
しかし、ラティッツには効かなかった。

「お前の力では俺には勝てんぞ」

ラティッツはハヤテの足を掴むと投げ飛ばした。

「うわああああ！」

ハヤテはアテネに突っ込んだ。

ぶちつとアテネがキレた。そしてキングミダスが姿を現した。

キングミダスはラティッツを攻撃しようとしたが、しかし避けられ、強力な一撃を食らって粉々に砕け散ってしまった。

「私の英霊が！」

「アーたん、魔貫光殺砲は撃てる？」

「まさかあなた、悟空みたいに死ぬ気ではありませんよね？」

「あいつを倒すにはそれしか方法がない。それにサイヤ人が実在するならドラゴンボールもあるはず」

「そんなのあるわけ……」

言い掛けてアテネは思い出した。ロイヤルガーデンにそのような名前の球が七つあったことを。

「解りましたわ。ハヤテ、あの男を羽交い締めにしなさい」

「了解」

ハヤテはラティッツの背後に回ると羽交い締めにした。

「なっ、貴様、何をする！？」

「こうするのよ」

アテネは魔貫光殺砲を放った。

ハヤテ諸共ラティッツの腹を貫く光線。

ラティッツとハヤテは倒れた。

「ハヤテ！」

アテネはハヤテの下へ駆けた。

「アーたん、お嬢様のこと、頼むよ」

「死んじゃダメよハヤテ！」

その時、ラティッツが、「今から一年後、俺の仲間が二人やって

くるぞ」と言って息絶えた。

「アーたん、僕あの世で界王様の修行を受けてくるよ。一年経ったらドラゴンボールで生き返らせて」

ハヤテはそう言って消失した。

第3話：蛇の道

ティウンティウン。

アテネの魔貫光殺砲を受けてラティッツ諸共死亡したハヤテはあの世にやって来た。

（ここがあの世か。閻魔大王さんはどこに居るんだろう？）

建物の通路を進むと扉の前に差し掛かった。

（ここか？）

ハヤテは扉を開けて部屋に入室する。

中はかなり広く、奥に大きな机が置いてあった。

ハヤテは机の前まで行った。するとドラゴンボールに出て来る閻魔大王と瓜二つの男が椅子に腰掛けていた。

「おお、はやてよ、しんでしまうとはなさない」

「ハハ……、何処かで聞いた事あるセリフですね」

ハヤテのごとく！SS超アンソロジー大作戦である。

「地の文がばらさないで下さい。で、貴方が閻魔大王さんですか？」

「如何にも、私が天国行きか地獄逝きかを決める閻魔大王だ。お前は攫^{さら}われたナギを助けるため鳥取砂丘へ行つてラティッツと戦って死んだのであったな。そんなお前には……」

閻魔大王は机の上に置いてある書類に判を押す。

「蛇の道を進み終点にある界王星に行く事を許そう」

「やつぱりあるんですね」

「何の事だ？」

「いえ、何でもありません。それで、蛇の道へはどちらへ行けばよろしいんですか？」

「あつちだ」

閻魔大王は指を差した。その先には黄色い雲がありその上に蛇の道がある。

「ありがとうございます」

ハヤテは蛇の道の始点まで行く。

（これを進めば界王星か。下に敷かれてる黄色い雲は何だろう？
落ちると地獄かな）

ハヤテは蛇の道を終点目指して駆け出した。

一方、地上ではアテネが桂家離れのヒナギクの下に訪れていた。

「成る程。今から一年後、この地球にサイヤ人とかいう輩がやってくるといことね？」

「そうよ。だから、貴方にも強力して欲しいの。一年後に備えて体を鍛え、サイヤ人を迎え撃つのよ。じゃないと地球はサイヤ人に滅茶苦茶にされてしまうわ」

「貴方、可笑しいんじゃないの？ サイヤ人なんて居る訳無いじゃない。あれはマンガの中だけのことなのよ」

アテネは懐から一枚の写真を取り出した。それは鳥取砂丘に着陸したサイヤ人の宇宙船が写ったものである。

「信じられないわね。それより、ハヤテくんは元気？」

「死んだわ。でも大丈夫。一年後にドラゴンボールで生き返らせるから」

「あのね、ドラゴンボールもマンガの中だけの存在よ。そんなものがあつたら苦労しないわ」

「それがあるのよ。王族の庭城には」
ロイヤルガーデン

「そんなバカな」

「じゃあ見に来る？」

「いいわよ」

アテネはヒナギクと共にロイヤルガーデンへ向かった。

ハヤテは蛇の道を走っていた。閻魔大王の居る建物はもう見えな
い。

（終点まで後どのくらいだろう？）

そんな事を考えていると、お店らしきものが見えてきた。

（疲れたから、そこで少し休憩しよう）

ハヤテはお店の前まで行くと中に入った。

「いらつしゃいませ」

店員が出迎えた。

「お茶頂けますか？」

「少々お待ち下さい」

ハヤテは空いてる席に腰掛けた。

「お待ち遠様です」

店員はお茶とメニューを持って来た。

「決まりましたらお声をお掛け下さい」

ハヤテはメニューを見る。お金の単位、貫。

メニューを閉じ、お茶を飲み干すと店を出た。

「あ！ 無銭飲食！」

「あの世のお金は持つてません！」

ハヤテは脱兎の如く逃げ出した。

第4話：界王星

ハヤテが死んでから半年。アテネとヒナギクは王族の庭城にある精神と時の部屋で激闘を繰り広げていた。

「なかなかやるわね、アテネ」

「あなたこそ、この半年でかなり強くなったんじゃない？」

「アテネのお陰ね」

アテネとヒナギクはもの凄いスピードで拳と蹴りを相手に入れる。お互いもうボロボロだというのに攻撃の手を緩めない。

「そろそろ止めにしない？ もう夜だし」

「そうね」

二人は攻撃を止めると、精神と時の部屋から出て更衣室に行き着替えを始める。

「いい汗掻いたわ」

「私も」

着替えが済み荷物を持って更衣室を出る二人。

その頃、蛇の道を走るハヤテはようやく終点に辿り着いた。

「はあ……はあ……、まさかこんなに長いとは思わなかった」

ハヤテは上に顔を向ける。その先には球体が浮いていた。

「あれが界王星？」

ハヤテはアテネに教えてもらった舞空術で界王星と思しき球体の近くまで浮き上がった。すると強い力に引っ張られ、界王星の地面に叩き付けられてしまった。

「痛……」

立ち上がるハヤテ。

（何だか重力が地球より強い気が……）

その時、ハヤテの前に桃色長髪の少女が現れた。

（何かヒナギクさんにそっくりだな）

ハヤテはそのヒナギクにそっくりな少女に訊ねる。

「君は？」

「私は鮫島さめしま 夏奈子かなこよ。あなたは？」

「僕は綾崎 ハヤテ。界王って方に会いたいですけど」

「界王は私よ」

「いや、だから界王って方に会いたいですけど」

「界王は私よ」

「そうですか。君が……ええ！？」

驚き飛び上がるハヤテ。

「男じゃないんですね」

「男じゃなきゃいけないの？」

「いえ、別に。それより、僕に稽古をつけてくれませんか？」

「私を笑わせることが出来たらつけてあげるわ」

「ひよっとしてギャグの稽古ですか？ そんなもの必要ありません。僕が必要とするものは武術の稽古です」

「武術？ いいわ。私はこれから逃げるから、捕まえられたらつけてあげる」

そう言うつと夏奈子は踵を返して駆け出した。

ハヤテは追おうとするが、うまく走ることが出来なかった。

「その分じゃ稽古はつけられないわ」

いつの間にか後ろを駆けていた夏奈子が言った。

「夏奈子さん、いつの間に！？」

ハヤテは立ち止まり振り返ると、突っ込んできた夏奈子を捕まえた。

「捕まえましたよ」

「むっ……まあ、いいわ。武術の稽古だったわね。貴方、まともに走れないみたいだから、ちゃんと走れるようになるまで走りなさい。この星の重力に慣れるのよ」

「分かりました」

ハヤテは駆け出した。

こうして、ハヤテの稽古が始まった。

第5話：サイヤ人来襲

界王星に辿り着いて数日、ハヤテはまともに走れるようになっていた。

「夏奈子さん、次のステップに入りませんか？ 僕もう普通に走れますよ」

「界王様と呼びなさい！」

夏奈子は跳び蹴りを放った。

ハヤテに9999のダメージ！ ハヤテは死んでしまった。

「地の文、僕もう死んでますから！」

「誰と話してるかは知らないけど、修行を始めるわよ。先ずは向かってくる煉瓦を全て撃ち落とすのよ」

夏奈子は指をパチンと鳴らした。すると無数の煉瓦が現れハヤテに向かってくる。

「あれを撃ち落とせばいいんですね」

ハヤテは気弾を作り連射して煉瓦を全て撃ち落とす。

「まだよ」

無数の煉瓦が現れハヤテめがけて飛んでくる。

ハヤテは気弾を連続で投げて全て撃ち落とす。

「なかなかやるじゃない。次のメニューよ」

こうして更に半年が経過し、ハヤテは界王拳と元気玉を覚えた。一方、地上ではアテネが空き地でドラゴンボールを広げていた。

「出でよ、神龍^{シンロン}！ そして願いを叶えたまえ！」

すると、ドラゴンボールが光り、緑色の龍が姿を現した。

「さあ、願いを言え。どんな願いでも一つだけ叶えてやろう」

「本当に出るんだ」

ヒナギクは神龍を見て目をキラキラと輝かせている。

「神龍、天皇州 ハヤテを生き返らせてちょうだい」

「おやすいごようだ」

神龍の目が光り輝いた。

「願いは叶えてやった。さらばだ」

神龍は消え、ドラゴンボールが宙に浮き上がり、そしてバラバラに飛び去ってしまった。

その頃、界王星では……。

「ハヤテ、頭の輪っかが消えたわ」

「じゃあ僕は地上に戻ります」

ハヤテは駆け出し、界王星を一周して飛び上がり、蛇の道を舞空術で辿り、閻魔大王の居る建物へと着いた。

「閻魔大王さん、現世に戻るにはどうすればいいんですか？」

「あつちだ」

閻魔大王が指を差した先には、現世と書かれた看板が立てられていた。

「ありがとうございます！」

ハヤテは駆け、現世へ向かう。

鳥取砂丘では既に戦いが始まっていた。

戦っているのはアテネとヒナギク。相手はサイヤ人のパナツだ。そしてそれを傍観しているのがサイヤ人のペシータである。

「ハヤテはまだ来ないの!？」

「落ち着いて、アテネ」

「うっ！」

アテネがパナツの強烈な一撃を腹に受け吹っ飛んだ。

「アテネ！」

振り返るヒナギク。その隙にヒナギクはパナツに蹴り飛ばされてしまった。

「っ、強い……」

アテネは立ち上がりパナツの懐に入って攻撃しようとするが、カウンターをくらって吹っ飛んだ。

「あいつ、私たちじゃ歯が立たないわ」

その時、何者かが飛来してパナツを蹴り飛ばした。その何者かは全身水色で亀のような形をしていた。

「大丈夫か？ 君たち」

「「か、亀が喋った！ しかも二本足で立ってるし！」」
「痛……」

パナツは立ち上がり二本足で立つ等身大の亀を見た。

「ほう、カメツク星人か」

「カメツク星人？」

「ひよつとして貴方、ドラゴンボールを作った神様？」

「あんなやつと一緒にするな！」

カメツク星人はそう言い放つとパナツの懐へ一瞬で移動して強烈な一撃を浴びせた。

「痛えじゃねえか！」

パナツがカメツク星人にラッシュ攻撃を浴びせる。カメツク星人はボロボロになり倒れた。

「雑魚が何人来ようと一緒だぜ」

パナツはカメツク星人の頭を踏みつけて潰した。

ティウンティウン

かめつくせいじんはしんでしまった

「ちよつと地の文、何殺してんの！？」

「次は貴様の番だ」

パナツがヒナギクの下に歩み寄る。

「地の文、何とかしてちょうだい！」

.....

（そんな、何も起きないなんて……）

ヒナギクが死を覚悟した。その時、ハヤテが現れパナツを蹴り飛ばした。

「ハヤテくん」

「ハヤテ」

「ヒナギクさん、アーたんと一緒に逃げて下さい」

パナツは立ち上がり、ハヤテを見る。

「誰かと思えば下級戦士のキヤルロットか」

「僕は綾崎　ハヤテです。そんな名前ではありません」

「知るか！」

パナツがキヤルロットに襲いかかる。

「地の文、僕は綾崎　ハヤテですよ」

ハヤテはパナツの攻撃を受けて転がった。

「その程度ですか」

ハヤテはネックスプリングを決めると気を上げる。

「はああああ……！　界王拳！」

赤いオーラを身に纏うとハヤテは猛スピードでパナツを攻撃。翻弄する。

あつという間にボロボロになったパナツは地面に横たわった。

「ペ、ペシータ……」

ペシータがパナツに近付き、手を掴むと上に投げ飛ばして光線を放った。

「役立たずは死ねえ　っ！」

「ペシータ！？　ペシータ！」

パナツはペシータの一撃で木っ端微塵になった。

「なっ、仲間を！？」

「「酷いわ！」」

「役立たずは必要ない。足手纏いになるからな」
あしでまと

ペシータはそう言うのとハヤテに歩み寄る。

「貴様、思っていたより遥かに強いみたいだな。面白い、相手になつてやる」

ハヤテは構えた。

ペシータはハヤテの下へ高速で飛行する。

懐に入ったペシータの拳がハヤテの顔面に……。

第5話：サイヤ人来襲（後書き）

次回よりバトルに突入します。
乞うご期待

第6話：ハヤテ対ペシータ

ペシータの拳がハヤテの頬にめり込み、ハヤテは吹っ飛んだ。

「痛……」

ハヤテは立ち上がると、地面ギリギリを飛行してペシータの懷に入ってパンチを繰り出した。

「うわっ！」

吹っ飛ぶペシータ。

「思ったより威力があるな。だが……」

立ち上がったペシータは戦闘力を上げる。

「はああああ……！」

そしてハヤテに接近して連続攻撃を浴びせる。

あつという間にボロボロになったハヤテは、「界王拳！」状態になってペシータに反撃する。

「うお！」

吹っ飛んだペシータに追い打ちを掛けて叩きつける。

ペシータは地面に突っ込んだ。

「ククク……、なかなかやるな、キャルロット。だが」

立ち上がったペシータはエネルギーボールを作り出した。

「弾けて混ざれ！」

巨大化したエネルギーボールを見つめ、ペシータは大猿に変身した。

「フハハハ……！　こうなってしまうば貴様はもうおしまいだ！」

大猿ペシータはハヤテに襲いかかる。

（大猿か。それなら尻尾を斬れば）

ハヤテは大猿ペシータの背後に回って尻尾を斬り落とした。

「何！？」

大猿ペシータは見る見る内に元に戻っていく。

「畜生！」

ペシータはハヤテに接近し連続攻撃！

ハヤテも負けじと応戦する。

「うわっ！」

隙を突かれて吹っ飛ばされたハヤテは体勢を立て直して、両手をボールを掴む形にして腰へ持つて行く。

「これでもくらってくだばって下さい！ かーめーはーめー波ー！」

「キャリック砲！」

ペシータは光線を放ちハヤテの光線を相殺する。

「これなら！」

ハヤテは両手を上に掲げた。

（世界中の生命たちよ、僕に元気を分けてくれ！）

ハヤテは出来上がった小さな元気玉をペシータに投げつけた。

「そんなもの！」

ペシータは光弾を投げて相殺しようとするが。

「何！？」

元気玉はペシータに当たり爆発した。

煙が立ち込め、やがて煙が消えるとボロボロのペシータが現れた。

「くそっ、覚えてろ！」

ペシータは宇宙船に乗り込むと飛び去っていった。

「ハヤテ！」

「ハヤテくん！」

アテネとヒナギクが駆けてくる。

「やったわね、ハヤテ！」

「アーたん、カメツク星に行こう」

「はあ？」

「さっき亀が死んだでしょ？ 亀が死ぬとドラゴンボールが使えなくなるんだ」

「え？」

「界王様に聞いたことなんだけど、ドラゴンボールはさっき殺された亀が作った物なんだ。だから考えたんだけど、亀の故郷である力

メック星に行けば本場の神龍が居るんじゃないかと思っただ」

「成る程。本場の神龍に頼んでさっきの亀を生き返らせてもらうのね」

「うん」

「……………」

話に付いていけない人、約一名。

「ヒナギクさん」

「え？」

「これから宇宙へ旅立ちます」

「本当に？」

目をキラキラと輝かせるヒナギク。

「行きますよね？」

「もちろん、行くわ」

こうしてハヤテたちはカメック星へ行くことになった。

第7話：極悪宇宙人フレーム

牧村 志織まきむら しおりに事情を説明し作ってもらった宇宙船にハヤテ、アテネ、ナギ、ヒナギクの四人は乗っていた。

「何でナギが居るの？」

ヒナギクの問いにナギは、「別にいいじゃないか」と答える。

「そう言えば何で居るんですか？ お嬢様」

「ハヤテ、お前もか！」

なぜナギが宇宙船に乗っているのかというと、三千院家のお屋敷でハヤテとアテネの会話を聞いたからである。

「で、このメンバーで行くの？」

もう宇宙を飛んでまーす。

「そうだったわね」

「誰と会話してるの？ アーたん」

「地の文」

疑問符を浮かべる三人。

「お前、頭大丈夫か？」

「大丈夫よ」

そんなこんなで宇宙船はカメツク星に到着したとき。

「地の文、いくらなんでも早すぎないか？」

.....

「ハヤテ、地の文が何も言わない」

「ナギ、地の文が答える訳ないでしょ」

そんな会話をしながらハヤテたちは宇宙船から降りた。

「ここがカメツク星か」

「何かナメツク星みたいですね」

「フリーザとか居るのかしら？」

その時、遠くで爆発音がした。

「行ってみよう」

ハヤテとアテネ、ヒナギクはナギを残し舞空術で音の聞こえた方へ飛んでいく。

「アーたん、家があるよ」

「そうね。しかも燃えてますわ」

「きつとあいつがやったんだね」

岩の影に隠れながら、ハヤテたちはフリーザに似た生物を見た。

「早く出さないとこうなりますよ」

その生物は何かを欲しがっているようだった。

『ハヤテよ、聞こえるか、ハヤテよ』

ハヤテの頭に夏奈子の声が響いた。

「あ、界王様。何ですか？」

『今お前が見ているのは宇宙の帝王フレームと言ってとても恐ろしいやつだ。絶対に近付くな』

「分かりました」

「あ、見て！」

アテネの言葉にドラゴンボールを運んでくるカメック星人をハヤテは見た。

「最初からそうやって素直に出してくれればいいんですよ」

フレームはドラゴンボールを手にとるとビームでカメック星人の心臓を貫いた。

「うっ！」

ティウンティウン

かめつくせいじんはしんでしまった

「赦せない……」

ヒナギクは呟くとフレームに接近して手にした正宗を振り下ろした。

ひらりとかわすフレーム。

「ヒナギクさん！」

ハヤテとアテネはヒナギクの下に向かった。

「誰ですか？ 貴方たちは」

「地球人よ」

ヒナギクはそう答えて正宗を振るうが、かわされてしまう。

「鬱陶しいですね」

フレームの放ったビームがヒナギクの胸を貫く。

「うっ！」

胸を押さえるヒナギク。

「ヒナギクさん！」

「さて、私は最後のドラゴンボールを探しに行くとしましょう」

フレームはそう言って飛び去っていく。それと入れ替わりに、頭に二本の角を生やし戦闘服を着た紫色の生命体が現れた。名はキニユー。フレームの手下である。

「お前たちの相手はこのキニユー様がしてやろう」

「あなた方、いい人には見えませんね」

「大方、全宇宙の支配を企む宇宙人ってどこかしら？」

「よく分かったな。俺たちは全宇宙を支配しようと企む宇宙人なのだ。我々の邪魔をするというなら死んでもらう」

「何か戦わなきゃいけないって感じがするんですが……？」

ファイエル！

キニユーが攻撃を仕掛けてきた。

吹っ飛ばされるヒナギク。

「ヒナギクさん！」

ハヤテは咄嗟にヒナギクを捕まえる。

「有り難う」

「あなた方はなぜドラゴンボールを？」

「全宇宙を支配するためだ」

「そうですか。しかし、そんなことさせる訳にはいきません」

ハヤテはヒナギクを下ろすとキニユーに突進した。

パンチが決まり吹っ飛ぶキニユー。

「ほう、この私とやろうというのか。いい度胸だ」

「アーたん、ヒナギクさんを連れて宇宙船に戻っててくれる？」

「分かったわ」

アテネはヒナギクを連れて宇宙船へ戻っていった。

「お前、見かけによらず強そうだな」

「それはどうも」

両者は構え、突進した。

第8話：ボディチェンジ　ハヤテがキニユーでキニユーがハヤテ！？

ハヤテの拳がキニユーの顔面に当たり、キニユーは吹っ飛んだ……が、体勢を立て直し、ハヤテに接近して蹴り飛ばす。

「うわっ！」

後方へ吹っ飛んで岩に激突、めり込んだ。

「界王拳！」

赤いオーラを身に纏いながら目にも留まらぬ速度でキニユーに接近して連撃を浴びせる。

キニユーの体は見る見るうちに傷だらけになっていく。

（どうして何もしないんだ？）

その時、キニユーがハヤテの猛攻から脱出して距離を取り、自分の胸に穴を開けた。

「がはっ……はあ……はあ……」

ハヤテはキニユーの意味不明な行動に疑問符を浮かべた。

「強い……いい身体だ。気に入ったぞ」

（まさか！？）

「チェーンジ！」

奇妙な光線が放たれ、ハヤテに当たった。

ナギの居る宇宙船の前に、死にかけのヒナギクを連れたアテネがやってきた。

「お前たち、何が遭ったのだ！？」

「フリーザみたいなのが居て村を襲ったの。それで助けに入ったらこのザマ」

「そうか。ハヤテはどうした？」

「ハヤテくんならキニユーとかいうやつと戦ってるわ」

その時、ハヤテがやってきた。左目にはスカウターが着いている。

「キニユーを倒したのね」

「……………」

ハヤテは無言を回答に光線を放った。

「きゃあ!」

「うわあ!」

吹っ飛ぶ三人。

「ハヤテ、お前どうしたんだよ!？」

「ハヤテ? 違うな。俺はキニユー様だ!」

「チェンジとかいう怪しげな技で入れ替わったのか？」

「物分かりのいいやつだ」

「ヒナギク、フルボッコにしろ」

「任せて」

ヒナギクはハヤテの方へ歩き出す。

「ヒナギク、その体じゃ無理よ!」

「大丈夫」

正宗を手に駆け出し、ハヤテの懐に入って攻撃。

「うわああああ!」

「ハヤテくんに体を返しなさい!」

「ぎゃああああ!」

ハヤテの体から血飛沫^{しづき}が上がる。

「何故だ!?! この体は最強の筈!」

「この世で最強なのは私よ!」

「ならば!」

ハヤテは距離を取った。

「チェーンジ!」

奇妙な光線がヒナギクに迫る。

（動けない!）

その時、キニユーが現れハヤテの前に立ちふさがり、光線を浴びた。

「戻った!」

ハヤテは両手でボールを掴むようにして腰へ持つて行き、
「かめはめ波！」

光線をキニユーに放った。

「うわああああ！」

キニユーは消滅した。

「うっ！」

ハヤテは気を失い倒れた。

「ハヤテくんが死んだ……？」

「いや、死んだのはキニユーよ」

「と言うことは！」

ヒナギクは横たわるハヤテを見た。

「ハヤテくん！」

ハヤテの下へ駆けよつて抱き起こす。

「ヒナギク、ハヤテを宇宙船の中へ」

「うん」

ヒナギクはハヤテを背負い宇宙船の中へ運んだ。

第8話：ボディチェンジ　ハヤテがキニユーでキニユーがハヤテ！？（後書き）

ヒナギク「ちよつと待って。私、死にかけじゃなかった？　キニユーと戦ってるわよ？」

それは大人の事情ということだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0720j/>

ハヤテのドラゴンボール

2010年10月10日00時05分発行